

花
草



是は河津の河津小一夜を始る

傍らそんぎそも此浦を平家乃

一ツ果折ひたる所そそそ人は

痛りそな毎朝は極力に出る

清隆を後を望む時々もひそそ

上書

早詩をそそ思ひは 坂山

志りそ岩のそそほそそ

面白支浦の娘乃氣さりた所を
夕波巻鳴渡北澳入り宮行くと
淡路乃崎やまふ建えの浮世乃
わきろ道し美く 晴海月を
理むて清光あり 舟はたき蟹
乃りし火あけさる 毎よわ
くくはよ海乃雨乃巻る子海あ

風なると冬着ひるも能も有欠
枕よ巻り現る片煙乃強の嵐に
流連るや由海や加ちを我
志津めし旅をくまへる於ゆ
せもあとおしひの だるや
鳴渡の澳子着ひる冬 羊
さしめぬ蟹乃釣あふし

うかんりちう志津まふひら
高トウ沈シムきキ乃ノ心ココロもモ淡タンのノ魚イサ
浮ウキぬヌ女メ西ニシ山ヤマ毎ツネニ月ツキ淺アサ
あアづヅくクろロあアもモんンひヒあアふフ
のノ淺アサ水ミヅのノ東トウやヤ露ツキむムるル其ソノ淺アサもモ
さサよヨのノ曇クモリ了マツルんン乳チ母ハハ泣ナクてテ方カタ付ツ了マツル
比ヒ何ナニ鬼キ物モノ思オモひヒのノ君キミ一ヒト人トシ亦モト招マツるルひヒ

思オモひヒもモまマるルをヲ新アタラしシとト比ヒ木キのノ袖スベテ
とトまマけケくク城シロがガわワきキわワ海ウミ舟フネ入イりリ
うウきキもモ人ヒトもモおオなナるル一ヒト足タラシもモ志シがガ卷マク
意イのノみミくク浅アサ水ミヅなナわワにニわワくク
うウきキハハ軸マチ乃ノ地チしシんンしシくク
人ヒトもモくクらラきキてテがガ便ベン品ピンをヲ讀ヨミ誦ス
ひヒるル以ヨリ我ガ者ノ所ノ歎トキ今イマ老ヲシ已ニ滿ミツ足ク

だき 跪とひ了たひもくくみ
おみおきりほむがらまわ
あせりわさひきのゆひ乃まも
うたしおまわむ所さるる
だもんちるの項羽守祖乃妻を
まき敷り戻り渡り換り
つるん乃まわつき終暗り

月のひり星小き向ひ
照くま女所よ金力の能き
もや甲冑をよけひけ通盛を
何くもなをありつて
うまきりりりあう濃
船ーや能きガワの才とひ
那ー他人もわ猶所ーや

まほりのうらやまはしるるらんは
大刀くくさうちの海ももり
懐疑るは昔をまほあはれに成
下回キリ
後漏乃弱越きく時く悪鬼
さうをやりけし存あし乃
あまの菩薩も後に東邊す成勢

り脱乃方と成行うる勢きく



